

## 杉浦日向子の視点 ～江戸へようこそ②～

## 杉浦日向子・漫画の仕事

江東区深川江戸資料館

杉浦日向子さんの初期の仕事である漫画について単行本化された作品を中心に紹介していきます。

## 1. 『糸ひもせす』(現在、ちくま文庫)

杉浦日向子は、昭和 55 年 (1980) の「<sup>つうげんむろの</sup>通言室之梅」でのデビュー以降、読み切り作品を『ガロ』(青林堂)誌上に次々と発表していきます。それらの作品を中心に昭和 58 年に出版されたのが、第 2 作品集『糸ひもせす』です。恋愛物語、怪異物、吉原を舞台にした作品などで、江戸庶民の生活を描きます。絵のタッチも作品によって変わり、話の中身と共に、杉浦の多才さが伝わってきます。作者の若さが驚きを持って迎えられると共に、独特の技法・時代考証の確かさなどから文芸漫画とも言われました。

## 2. 『二つ枕』(現在、ちくま文庫)

昭和 56 年 (1981) に『ガロ』誌上に発表された 4 編の連作漫画。昭和 61 年に出版された単行本には、遊廓を舞台とした同傾向の作品が収録されています。現代の浮世絵師とも言われた杉浦日向子ですが、『二つ枕』では、最初から浮世絵っぽくやろうと意図したと語っており、鈴木春信、喜多川歌麿風に描いたりもしています。そんな杉浦は、当時やまだ紫・近藤ようこと共に「ガロ三人娘」と呼ばれていました。

## 3. 『合葬』(現在、ちくま文庫)

昭和 57 年 (1982) から『ガロ』に連載された作品。翌年、初めての単行本として出版されました。時代の転換期を一途に生きた彰義隊の悲劇を描いた歴史ロマン作品です。お兄さんの雅也さんは、別格の作品として「ラストシーンに唄いながら登場する少女のまなざしやしぐさが希望を感じさせる余韻となり、妹の理想ではないか」と言っています。この作品は第 13 回 (1984 年度) 日本漫画家協会優秀賞を「新しい感覚の時代漫画を作り上げた」ことを理由に受賞しています。

## 4. 『ニッポニア・ニッポン』(現在、ちくま文庫)

昭和 58 年 (1983) から翌年にかけて『別冊アクション』(双葉社)などに発表された短編を集めた作品



「虚々実々 通言室之梅」

月刊『ガロ』 青林堂 昭和 55 年 (1980)

『糸ひもせす』

ちくま文庫 平成 2 年 (1990) 所収

集で、この頃から、『ガロ』以外の雑誌からも執筆依頼がくるようになりました。単行本タイトルの『ニッポニア・ニッポン』とは特別天然記念物トキの学名で、幕末から明治を舞台にした作品が多く、日本が開花していく時代への思いを感じることができます。

## 5. 『百日紅』(現在、ちくま文庫)

昭和 58 年 (1983) から 63 年まで『漫画サンデー』(実業之日本社)に連載された作品。文化文政期 (1804 ~ 1830) の江戸を舞台に、葛飾北斎、北斎の娘のお栄、弟子の栄泉、国直などとの日常生活が描かれます。自らの絵師としての姿勢も重ねられた内容、扉絵の浮世絵作品の模写など、この作品にかなりの力を入れていて、杉浦日向子の代表作と言えます。杉浦の没後、アニメ映画化もされ、作品は『Miss HOKUSAI』として翻訳され、現在でも海外で広く読まれています。

## 6. 『風流江戸雀』(現在、新潮文庫)

漫画雑誌ではなく、一般誌『潮』(潮出版社)に、昭和 58 年 (1983) から昭和 62 年まで連載された

作品。無記名で投句された川柳を柄井川柳が選んで作った本『柳多留』の作品をモチーフに、毎月4ページで、江戸庶民の生活を笑いと共に漫画化しました。この作品で、第34回(昭和63年度)文藝春秋漫画賞を受賞。杉浦は「今は、ままごと遊びに夢中になっているところを『ごはんですよー』と呼ばれた気持ちです」と漫画家として認められてきた喜びを語っています。

## 7. 『花のお江戸の若旦那』(河出書房新社)

昭和58年(1983)から62年まで、一般誌『アサヒグラフ』(朝日新聞社)に発表された連作で、杉浦没後の平成28年(2016)に彩色江戸漫画として一冊にまとめられました。その気ままな生活ぶりにあきながらも、憎めない面がある若旦那の行動は、杉浦日向子が好きだった落語の要素がたっぷりと込められています。杉浦は、「この次生まれてくるなら、若旦那、そう決めているのです」「本気で、ちゃんとしたくない」と他の著書でも書いているとおり、楽しんで描いていることが伝わってくる作品です。

## 8. 『YASUJI 東京』(現在、ちくま文庫)

昭和60年(1985)から61年にかけて『小説新潮』(新潮社)に発表された連作。この頃の杉浦は作品発表の場が、漫画雑誌から一般誌へ移っています。最後の浮世絵師といわれた小林清親に弟子入りし、風景版画家として活動し26歳で夭折した井上安治に魅かれた男女が、現在と明治を行き来する幻想的な



『百日紅』表紙  
『漫画サンデー』 実業之日本社  
昭和58年(1983)～昭和63年(1988)  
ちくま文庫 平成8年(1996)

作品です。杉浦は「安治によって、江戸と、自分の住む街は、完璧につながった。平凡な日々は途切れる事なく、この地に積み重なって、今日がある」とエッセイに書いています。

## 9. 『東のエデン』(現在、ちくま文庫)

昭和61年(1986)に『サンデー毎日』(毎日新聞社)に発表された「東のエデン」の他、杉浦日向子には珍しい、明治時代を舞台とした作品集。タイトルは、エリア・カザン監督の「エデンの東」のパロディです。4人の貧乏書生の青春を描く「閑中忙あり」では、江戸を引きずりながらも明治という新しい時代を受け入れようとする姿が描かれています。「YASUJI 東京」と同様に、明治になって急に近代化したのではなく、江戸と地続きで明治という時代があるという杉浦の姿勢が感じられます。

## 10. 『百物語』(現在、新潮文庫)

昭和61年(1986)から平成5年(1993)まで、足掛け8年『小説新潮』に連載された長編連載作品。「百物語」怪談会については、現在では多くの人が知ることとなりましたが、連載当初はそれ程ではなく、杉浦は『一日江戸人』で正しい方法を紹介しています。全体的にオドロオドロした恐ろしい感じはなく、連載時には「置き去り漫画」と言われたというエピソードもあります。毎回、異なる描き方であることや浮世絵の引用など楽しみながら描いていることも伺え、杉浦日向子のもうひとつの代表作といえる作品です。

## 11. 『とんでもねえ野郎』(現在、ちくま文庫)

講談社の漫画雑誌『コミック・モーニング』に昭和61年(1986)頃に連載された作品。あと5年で明治維新という幕末を舞台に、行き当たりばったりの生活をしている道場主と、その夫をしっかりとコントロールしている妻との物語で、そこには杉浦が、江戸に関するエッセイなどで書いている江戸っ子夫婦の姿が浮かび上がってくるようです。

杉浦日向子は、平成5年(1993)に漫画家を引退し、隠居宣言をしますが、漫画の仕事は、後にメインの仕事となる江戸風俗研究と密接につながっています。

(主な参考文献)

『杉浦日向子全集 全8巻』

(筑摩書房/1995～1996)

「杉浦日向子全著作解題」末国善己

『ユリイカ 総特集 杉浦日向子』青土社

2008年所収